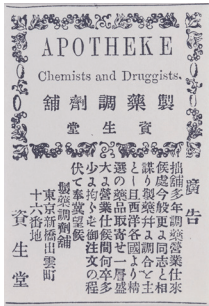


万物資生

中村裕太は、資生堂と

を調合する

中村裕太は、資生堂と を調合する



「製薬洋風調剤舗 資生堂 開業広告」 1877 年

太陽から来る光線を地上の炭素化合物が受取つて相接して萬物が出来る。故に萬物の發生する物質的方面は地にある。目に見えないつかまへられないものが天から来て、地上の物質がそれを受取つて生物を生ずるといふ
飯島忠夫『易经研究』信濃教育会、1932 年

東京新橋出雲町ニ於テ新ニ西洋薬舗ノ正則ニ做ヒ調薬ノ市店ヲ闢キ、各種ノ薬品ヲ精究試験シ其価ヲ卑シ分量ヲ精整シ、需メニ応シテ製劑調薬多少ヲ揀ハス只命是奉セン。
福原有信「報告」『新聞雑誌』第 47 号、1872 年

福原有信（1848－1924）
資生堂の創業者。大学東校（現・東京大学医学部）に学び、海軍病院薬局長になりますが、西洋医学を広く一般に役立てたいと考え、1872 年、23 歳のときに職を辞し、民間初の洋風調剤薬局「資生堂」を銀座に創業しました。日本で初めて医薬分業を唱え、日本初の練り歯磨「福原衛生歯磨石鹸」（1888 年）や化粧品「オイデルミン」（1897 年）、ソーダファウンテンの設置（1902 年）も手掛けました。今日の資生堂の基礎を築くとともに、多くの企業の役員にも名を連ねたほか、近代医薬界に功績を持ちます。



「しらべもの [考現学] 展覧会」 1927 年
左：会場風景 右：展覧会目録 工学院大学図書館提供

今和次郎（1888－1973）
青森県弘前市生まれ。建築学者、風俗研究家。1912 年東京美術学校図案科卒業。1917 年頃から郷土会へ参加し、柳田国男らと農村・民家の調査を行いました。関東大震災後、「バラック装飾社」や「考現学」を吉田謙吉とともに始め、その後の研究範囲は装飾・風俗・生活・家政にまで及びました。（藤森照信 編『今和次郎考現学入門』ちくま文庫より）

考現学
今和次郎がバラック装飾社の活動とともにしていた吉田謙吉と始めた風俗調査。風俗調査で採集した場所は銀座、本所・深川、東京郊外（高円寺、阿佐ヶ谷）、公園（日比谷、井の頭、早稲田・慶應義塾大学付近、上野・浅草の商店街など、広範囲で調査対象も多種多様でした。考現学研究の成果は 1927 年に新宿の紀伊国屋書店 2 階で開催された「しらべもの [考現学] 展覧会」で展示され、今和次郎、吉田謙吉の共著で『モデルノロヂオ 考現学』（春陽堂、1930 年）や、『考現学採集（モデルノロヂオ）』（建設社、1931 年）が出版されました。

陳列場／資生堂ギャラリー
1919 年、資生堂初代社長の福原信三によって資生堂化粧品部 2 階に「陳列場」（現・資生堂ギャラリー）が開設されました。当初は、

季節に応じ化粧品その他の新製品を展示すると同時に、そのないときはアートギャラリーとして使う構想があり、集客や宣伝を目的とした展覧会から、やがて貸画廊としての運営形態を確立していきました。信三自らが持ち込まれる展覧会を審査し、ときには自ら企画することもありました。その結果、展覧会の水準を維持し、彼のプレーンとなる人達のネットワークが形成されていきました。洋画、日本画、彫刻、版画、工芸、写真、服飾、舞台美術、園芸、建築、デザインなど幅広いジャンルの展覧会が行われています。ギャラリーの活動は、資生堂の芸術文化支援活動の原点であり、100 年以上にわたる活動を通して、日本の芸術文化の新興に寄与してきました。現存する日本で最古の画廊といわれており、資生堂ギャラリーを作品発表の場として、後に日本美術史に大きな足跡を残した作家も数多くいます。1990 年代からは、現代美術に主軸を定め、同時代の新しい表現を積極的に紹介しています。2001 年には、「東京銀座資生堂ビル」の地下 1 階にリニューアルオープンし、現在に至ります。

1 1902 年 出雲町店にソーダファウンテンを設置



資生堂「ソーダファウンテン（ソーダ水製造機）」1902 年

ソーダファウンテン
1902 年に銀座の資生堂薬局店舗内に設置した、ソーダ水とアイスクリームの製造と販売を行うコーナーのこと。帝国生命保険株式会社（現・朝日生命保険相互会社）の創設にも携わり、明治の財界の大立者として活躍していた福原有信は 1900 年、帝国生命保険株式会社 社長として欧米視察の旅に出ました。第 11 回パリ万国博覧会を視察後にアメリカへと渡り、そこで目にしたドラッグストア（薬局）の経営スタイルを日本の店舗に導入しようと考え、店舗内に「ソーダファウンテン」を併設し、アイスクリームとソーダ水を製造販売し始めました。本物志向の有信は、機械一式はもちろんのこと、グラスからストロー、スプーン、シロップに至るすべてをアメリカから直輸入。氷水が一杯 2 銭の当時、アイスクリーム 15 銭、ソーダ水 10 銭、アイスクリームソーダ水 25 銭で販売していましたが、新橋の芸者たちから火が付きたちまちま街の話題となりました。また、ソーダ水一杯につき、同じく「資生堂の赤い水」と好評だった化粧品オイデルミンを景品につけるという宣伝も新橋の芸者たちの心を射止めたようです。ソーダファウンテンは、1916 年には資生堂飲料部、1928 年には資生堂アイスクリームパーラー（現・資生堂パーラー）へと発展。資生堂アイスクリームパーラー開設当時、吹き抜けの 2 階にはオーケストラボックスが設けられ、音楽を聴きながら食事や喫茶が楽しめました。資生堂のソーダ水やアイスクリームは、森鷗外 of 短編『流行』をはじめさまざまな文学作品にも登場し、銀座の名物となり、人々に“ハイカラな資生堂”というイメージを強く印象づけることになりました。

岸田劉生（1891－1929）
日本の近代美術を代表する洋画家。『東京日日新聞』の記者でありさまざまな商いも手掛けた岸田吟香の四男として、銀座の薬房兼書房「楽善堂」に生まれました。黒田清輝の主宰する白馬会楽橋洋画研究所で本格的に油彩画を学びます。1912 年には、斎藤与里、高村光太郎、萬鐵五郎らとともに、ヒュウザン会を結成。1915 年には、木村荘八、椿貞雄らとともにのちの草土社を結成、若い画家たちに圧倒的な影響を与えました。劉生は楽善堂周辺の思い出を、「新古細句銀座通」と題し、新聞連載に挿絵とともに記しました。（初出:「東京日日新聞」1927 年 5 月 24 日～6 月 10 日）（<https://www.nhk.or.jp/nichibi-blog/400/413111.html>）

岸田吟香（1833－1905）
江戸で漢学を学び、1864年横浜でJ・C・ヘボンの『和英語林集成』の編集に協力。1865年浜田彦蔵（ジョセフ・ヒコ）の海外新聞創刊に参加。1868年にはバン・リードと横浜新報もしほ草を創刊しました。1873年東京日日新聞に入社、翌年台湾出兵に従軍し、日本最初の従軍記者となりました。1877年退社。その後はヘボンから学んだ目薬「精鏡水」を製造・販売する楽善堂を、東京銀座2丁目1番地に設立しました。中国との貿易、文化交流でも活躍しました。
(参考：<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/258.html>)

2 1915年 福原信三が「花椿マーク」を考案



福原信三筆による「花椿」色紙 1915年

福原信三（1883－1948）
資生堂初代社長（1927－1940）。写真家。資生堂創業者・福原有信、徳夫妻の三男。写真と絵画に興味を抱き画家を志しますが、父親の希望に従い薬学の道に進みます。千葉医学専門学校（現・千葉大医学部）薬学科卒業後、1908年ニューヨークのコロンビア大学薬学部に留学。卒業後、ドラッグストアとアメリカの化粧品工場で実地研修を経験した後、約1年間ヨーロッパ各地を歴訪。パリでは留学中の洋画家・藤田嗣治や川島理一郎らと交流し、芸術への造詣を深めました。1913年に帰国後、1915年より資生堂の経営を引き継ぎ、商品の製造、販売、宣伝の各分野に多彩な人材を集め、資生堂の基盤の確立に精力的に取り組みました。1916年には化粧品部を開店し、同時に意匠部と試験室を発足させ、薬品から化粧品主体に事業を転換させました。化粧品の開発に力を傾け、妥協を許さない美と豊かさを第一とする信念を貫きました。香水づくりでは、花や木の香りを模倣するのではなく、絵画や写真のように花や木が自然の中に映える印象そのものを表現しようと試みるなど、商品を芸術の域にまで高めようとしていました。

花椿マーク

1915年、それまでの商標「鷹」に代えて福原信三が考案した資生堂の新しい商標。（※1915年に原型を考案。広告に初めて用いられたのは1917年。商標登録は1919年。）1916年、事業の中心を薬品から化粧品の製造販売に転換。これを機に商標を改訂しました。新しい「花椿」の商標の考案にあたり、信三は自ら筆をとり、原案を作成しました。信三が商標に「椿」を選んだ理由としては、資生堂を代表する商品に「香油 花つばき」（後に「資生堂 花椿 香油」）があったこと、好きな花が椿だったこと、などの説があります。信三が描いた原案を元に意匠部員らが手を加え、当初9枚あった椿の葉は7枚となり、花のデザインは単純化され、枝の曲線が強調されるなどして、1918年にはほぼ現在の形に近い花椿マークが完成。さらに山名文夫をはじめとする何人かのデザイナーによって修正が施され、今日に至っています。



花椿マークの変遷

装飾美術家協会

1919年に、岡田三郎助、長原孝太郎、藤井達吉、高村豊周、斎藤佳三、今和次郎らによって結成されました。工芸は、芸術性と実用性を併せ持つ優れたものでなければならないという主張のもと、「従来の所謂工芸美術品の品位を高め其帰趣を示す事」を活動の目的としていました。第一回の展覧会を兜画廊で開き、第二回を資生堂で開催しました。展覧会はこの2回だけでしたが、これまでの工芸展には見られなかった

自由で新鮮な雰囲気が入りに強い印象を与え、工芸の将来に向けての明るい展望となりました。

資生堂意匠部

1916年に、福原信三が資生堂化粧品部を竹川町11番地（現在のSHISEIDO THE STOREの場所）に開店。同時に意匠部と試験室を発足させ、薬品から化粧品主体に事業を転換しました。意匠部には矢部季、小村雪岱、高木長葉、川島理一郎、今純三、諏訪兼紀、沢令花、前田真、山名文夫など多くの人材を集め、「リッチ」という言葉に代表される徹底した美意識の下にデザインを展開しました。

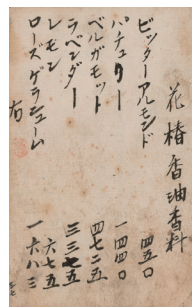
小村雪岱（1887－1940）

資生堂意匠部員（1918－1923）。画家。挿絵、装幀、舞台美術家。1887年埼玉県川越生まれ。東京美術学校日本画専科では下村観山に、卒業後は松岡映丘に師事しました。1914年に泉鏡花『日本橋』（千草館）の装幀を手がけて以降、鏡花の単行本の大半の装幀を担当しました。「雪岱」という雅号も泉鏡花の命名です。鈴木春信の浮世絵を好んだ福原信三は、雪岱の才能を愛し、従来の仕事を自由に続けてよいという条件で、1918年に意匠部に招きました。雪岱はその期待に応え、意匠部の草創期を支え、矢部季（連兆）とともに資生堂書体の制定に努め、『銀座』（1921年）の挿画装幀、ポスター、宣伝広告に多くの秀作を残しました。挿絵画家としても邦枝完二の『おせん』『お伝地獄』など数々の名作を発表。演劇や映画の装置製作・考証の分野でも異才を発揮し、『一本刀士俵入』『大菩薩峠』など数多くの舞台美術作品を製作し、一時代を画しました。国画会の同人でもあり、情趣と端麗な画風をもって「昭和の春信」と謳われました。

三須 裕

資生堂意匠部員（1918－1925）。三越の宣伝部で企画とコピーを担当していた三須裕は、1918年、福原信三が三越から招いた支配人松本昇の推薦で意匠部に入社しました。1919年に化粧品部内部を改装していた際、三須裕の提案により2階を改装。一角に陳列場を開設して、ファッション小物などの展示販売ができるようにしました。また、1921年には、『銀座』の刊行や、「子と母の雑誌」という副題のついた『オヒサマ』の創刊に携わる。1924年に創刊された『資生堂月報』（後の『資生堂グラフ』1933年創刊、『花椿』1937年創刊）などは、すべて三須の提案と助言によるものでした。資生堂ギャラリー最初のヒットといわれる1921年4月に開催された「舶来小児服展覧会」（パリ在住の川島理一郎から送られてくるファッション情報や商品を展示した展覧会）も、三須が企画に携わりました。

3 1917年 福原信三が「香水 花椿」を調香



資生堂『第貳号帖 各種化粧品香料処方』（香油 花椿） 1924年

資生堂「香油 花椿」 1907年

始めて「花椿」の名を冠した人気商品。純正椿油の「香油 花椿」は、1898年発売の「花かつら」を1907年に改称した商品で、化粧品草分けの時代、最もよく売れていました。資生堂の商標が「鷹」から「花椿」になったのは、この商品の評判も寄与していました。

資生堂「香水 花椿」 1917年

福原信三が調香した、資生堂初の香水。当時の日本では、香水といえば、自然の芳香を写しその名を付けるのが常識でしたが、そもそも椿の花には、特殊な園芸品種を除いて人間が感じとれるほどの芳香はありません。したがって「花椿」は、椿の香りをイメージして創作されたもので、信三は、「香油 花椿」の香りを基調に、椿の花の持つ重みと甘い香りとを調和させています。また、日本人の手で制作された最初の本格的香

水とも言われています。



福原信三《椿》(『光と其諧調』より) 1922 年

『光と其諧調』1923 年

福原信三が資生堂の経営とともに最も力を注いだのは写真でした。1921 年、「写真芸術社」を興して写真芸術活動の同人グループを結成、1922 年にはヨーロッパで撮影し月刊誌『写真芸術』に連載した作品を中心に、初めての写真集『巴里とセイヌ』を写真芸術社から出版しています。1924 年には日本写真会を結成して初代会長に就任しました。生前に刊行した写真集は 7 冊、『光と其諧調』論など多くの写真論を発表。日本近代写真の黎明期を切り開きました。

福原信三「香水 匂ひと香料」(『御婦人手帳』) 1927 年

福原信三は、香水の歴史、製造方法、使用や保存の方法、男女や季節によって好まれる香りについてなど、図版とともに『御婦人手帳』に 11 ページにわたり記しました。信三の香水に込めた熱意と高い知識がうかがえる内容です。『御婦人手帳』は、1927 年 12 月、資生堂が刊行した生活文化情報書籍。

柳田國男(1875－1962)／白茅会

民俗学者、官僚。新渡戸稲造を代表に貴族院書記官長だった柳田國男、農学者・那須皓、地理学者・小田内通敏らが 1910 年に郷土会を結成し、農村研究を行いました。白茅会は郷土会を母体に、16 年柳田國男と建築家の佐藤功一を中心に組織され、民家研究を行いました。農村生活や経済活動、社会生活、俗伝、衛生、教育に関する調査や地理分析、農家の敷地内配置や間取り、生活空間の機能的分析が行われました。(今和次郎『採集講義』青幻舎)

農民美術運動

画家・山本鼎は絵画修行のため滞在していたヨーロッパからの帰国途上のモスクワで、児童創造展覧会とロシアの農民美術に出会い、同じような事業を日本で興すことを思い立ちました。まずは小学校の臨画教育を排し子供の創造性を尊重すべきだと唱え 1919 年に長野の小学校で「第一回児童自由画展覧会」を開催しました。同年、「農民の手によって作られた美術的手芸品」の制作を指導し、「是れを販売流布しつつやがて民族と時代とを代表する『日本農民美術』を完成して以て、一般の美術趣味と国力とに裨益せんとする」ことを目的に講習生を募集しました。講習生には、山本鼎、倉田白羊、山崎省三らが、自由な創作による小物入れ、皿、鉢、盆などの木工芸品や人形、刺繍を施したテーブル掛けなどの制作を指導しました。1923 年には財団法人日本農民美術研究所へと発展し、資生堂ギャラリーで展覧会を行っています。

4 1921 年『銀座』を刊行

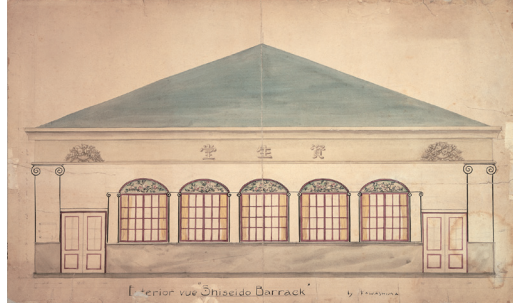


三須裕 編『銀座』 1921 年

三須裕 編『銀座』 1921 年

銀座の街路樹が柳から銀杏にかわるのを惜しみ、福原信三が制作しました。与謝野廣・晶子、川路柳紅、北原白秋などの作家、ジャーナリスト、文化人約 50 人の寄稿を収載し、多くの寄稿者が、銀座の並木には公孫樹よりも柳がいい、と書きました。巻頭には後藤新平東京市長の序文を、巻末近くに、柳並木撤去に反対の京新連合会の請願書ならびに東京市の回答を掲載しています。大正時代の銀座文献として、たいへん価値が高いといわれています。

5 1923 年 バラックの出雲町店を再建



川島理一郎《出雲町店の設計図(外部)》 1923 年

資生堂出雲町店 1923 年

1923 年 9 月に起きた関東大震災により、資生堂は銀座にあった店などを全て失いましたが、同年 11 月、仮建築で資生堂出雲町店を開店しました。仮建設とはいえ、意匠部員・川島理一郎の設計でヨーロッパの感覚あふれる特色のある店が完成しました。



「資生堂出雲町店」外観 1923 年



「カフェー・キリン(外観)」(『建築写真類聚 バラック建築巻一』、洪洋社) 1923 年 工学院大学図書館提供

川島理一郎(1886－1971)

資生堂意匠部客員。画家。1886 年、栃木県足利町(現・足利市)生まれ。1905 年に渡米、苦学して画家を目指します。保養地レーク・ブラシッドでキャンプしながら絵を売っていた川島はアメリカ留学中の福原信三に出会い、生涯にわたる親交を結びます。1911 年フランスに渡り、1913 年には、サロン・ドートンヌに日本人として初めて入選。その前年に渡仏してきた洋画家の藤田嗣治と意気投合し、芸術の根源を求めて古代ギリシャ人の生活を再現すべく共同生活をします。川島らは 20 世紀初頭の芸術の中心地パリにあって、マチス、ピカソなど当時の一流の芸術家たちと親交がありました。信三がアメリカからの帰路、ヨーロッパを歴訪中パリに遊学した折には通訳も務め、ファッションや演劇、美術など最新の文化へのよき案内人となりました。1919 年に帰国し、信三と再会。資生堂化粧品部の 2 階に新設された「陳列場」(現・資生堂ギャラリー)で個展を開催しました。信三は川島を意匠部客員とし

迎え再渡仏を援助。川島はこれに応え、最新のファッション情報やスケッチ、現地の商品を資生堂に送りました。大正末から昭和初年にかけて発行された顧客向け機関誌『資生堂月報』では、毎号のように、川島からのヨーロッパの最新情報が掲載されていました。1923年に帰国してからは、ポスターのデザインや店舗の設計も担当。川島は資生堂に対してのみならず、大正から昭和初期の日仏の文化交流の媒介者として大きな役割を果たしました。

梶田恵（1890－1948）

家具木工作家。1890年岩手県盛岡市生まれ。東京美術学校（現・東京芸術大学）図案科に入学。アカデミックな教育に不満を覚えて中退し、小山内薫による新劇運動である自由劇場に参加。舞台装置や家具の小道具の制作を担当しました。1916年寺尾商店に入り、家具の設計と製作を学びました。1919年に独立して梶田スタジオを開業。同時に宮沢工作所の顧問となり、福原家の室内装飾や資生堂の店内装飾を担当しました。1920年3月には資生堂ギャラリーにて、梶田の製作した「欧風鏡台陳列」の展示販売をし、資生堂は梶田の家具を積極的に扱っていました。1923年の関東大震災直後、資生堂飲料部が川島理一郎設計のバラックにより再建がなされた際、梶田は川島デザインの家具を設計制作しました。梶田のアール・デコスタイルの作品は1925年のパリの国際装飾美術展（アール・デコ展）に出品し受賞しました。梶田の制作する家具は高く評価され、宮内庁をはじめ上流階級に多くの高級家具を納めています。しかし戦争が激しくなると高級家具の需要が減り、梶田は郷里岩手県の一閑に疎開します。そして、不遇のうちに1948年逝去。没後、夫人によって、資生堂の仕事を含む家具・木工芸の設計図約1800枚が母校の東京芸術大学に寄贈されました。

6 1925年 武井武雄氏童画展覧会



『オヒサマ』創刊号 1922年

『オヒサマ』

明治末期から大企業の勃興と第一次大戦による好景気に支えられ、大正中期の東京・大阪で急増したサラリーマン家庭にとって、休日に子供連れで行けるレジャーの場が人気となりました。ある程度の購買力を持ち、文化的生活に憧れを抱く親子たちが銀座に繰り出し始めました。1921年に資生堂で開かれた「お子様作品展覧会」は大盛況となり、この成功に自信を得た三須裕は、福原信三に児童雑誌の出版を提言し、1922年に『オヒサマ』が刊行されました。読者像は都市圏に住む知識階級の母子。北原白秋、小山内薫など著名な執筆者を配し、資生堂宣伝部の矢部季らが挿絵を担当しました。母親向けには女性解放を唱える論説や芸術・教養に関する記事、パリで話題のロシアン・バレエなども紹介されましたが、1923年震災を機に終刊となりました。

武井武雄（1894－1983）

1920年に東京美術学校研究科卒業後、『子供之友』（婦人之友社）に挿絵を書き始め、1922年に創刊された大判の絵雑誌『コードモノクニ』（東京社）の題字と表紙を担当。1923年には、最初の自作童話絵本『お晰の卵』を出版して、児童出版美術の世界に、浮世絵の伝統を引く明治期の「お伽絵」とも、渡辺与平や竹久夢二による抒情画の系統とも異なる、明るく清新な風を吹き込みました。1927年には、村山知義らとともに「日本童画作家協会」を結成しました。初個展は1925年に資生堂ギャラリーで開催しています。

7 1928年 「資生堂アイスクリームパーラー」を開店



岸田劉生《銀座資生堂パーラーの図》1927年

8 1937年 「花椿会」を発足



富本家で福原信三



「第四回資生堂美術展覧会」会場風景 資生堂ギャラリー 1929年

山名文夫（1897－1980）

資生堂意匠部員（第一期：1929－1932、第二期：1936－1943、第三期：1948－1969）。デザイナー。1897年広島生まれ。1923年プラトン社に入社して、文芸雑誌『女性』や翌1924年に創刊される娯楽雑誌『苦楽』の挿画やカットを手がけました。資生堂を退社する沢令花の推薦により1929年、資生堂に入社。資生堂における山名の第一期では、山名のもつ優美かつ繊細なセンスが福原信三の「リッチでモダン」な美意識と相呼応して、従来のデザインワークを一層洗練させ、資生堂スタイルのひとつの頂点を極めました。1932年資生堂を辞めて独立し山名文夫アド・スタジオを設立しますが、まもなく写真家の名取洋之助らが設立した日本工房に入り、対外宣伝誌『NIPPON』のエディトリアルデザインを担当しました。1936年に再び資生堂に呼ばれ、山名は唐草を主体としたそれまでの広告を女性のイラストレーションを使った親しみやすい広告へと変えていきました。1943年には再び資生堂を離れますが、1948年、資生堂に三度目の復帰を果たします。この頃の山名は資生堂以外での活動も多く、1951年、美術団体の「日本宣伝美術会（日宣美）」創設に参加して、初代委員長となります。1952年には東京アート・ディレクターズクラブ（現・東京アートディレクターズクラブ、ADC）の創設にも参加しています。

資生堂「ビューティーチャート」（資生堂麗人の葉）1936年頃

1936年頃に制作されたビューティーチャートは、生活シーンに合わせて最も適した化粧法を案内するもので、2枚重ねの円盤をクルクルと回し、上の窓に現れた女性のように装うには、下の窓に出てくる化粧品（化粧下地、白粉、口紅、頬紅等）を組み合わせることを紹介するものでした。このチャートの裏には、「お顔型が千種万様でありますやうに、お肌の質やお色も無限に変化がございます（中略）、或るべく好適した品を正しく御使用願ひ、正しいお化粧遊ばしますやう、

弊社は実に3百余種類の品を揃へて御自由な御選択に備へて居ります」と書かれており、当時の資生堂の品揃えの豊富さをうかがい知ることができます。

資生堂「モダンカラー粉白粉」 1933年

山名文夫が描いた女性像をデザインに用いた洋風化粧品。海外製品の長所を採り入れながらも、日本人の肌に最も適するように製造された粉白粉でした。「洋風化粧」の要求を満たせるよう、色のバリエーションは、明るい肌色系統の色階順に1号色から9号色まで揃えると共に、使う女性の嗜好に合わせ、好みの色を調合することも可能でした。輸出用の商品などを除けば、それまで女性イメージを用いたデザインは少なかったのですが、「モダンカラー粉白粉」では、女性の正面像を使用しています。コールドクリームの「赤箱」を例外として、資生堂の化粧品は鮮やかな色づかいに乏しい傾向がありましたが、「モダンカラー粉白粉」はひときわ目立ち、9色の多彩な色バリエーションを連想させる外装に仕上がっています。デザインを手がけたのは山名文夫。以降、山名は資生堂らしさを湛えた女性像を創出し続けます。

資生堂「グリース・シャドー クリーム・シャドー モダンカラー粉白粉 色見本」1933年頃

店頭活動ツールとして作られた色見本帖。グリース・シャドーとは顔に陰影をつけ立体的に見せるための油性白粉で、夜の化粧に用いられました。映画や観劇、ダンスパーティー等の夜間の社交が増えてきた当時、立体化粧は最もモダンな化粧法でした。

富本憲吉(1886-1963)

1908年東美学校図案科(建築)在学中にロンドンに留学し、1910年に帰国。バーナード・リーチと親交を結び、彼の影響で陶芸の道に入り、郷里の奈良県安堵村に窯を築きました。新宮の西村伊作(のちに文化学院を創設)と交流し、その作陶を助けました。福原信三と交流のあったリーチの紹介により1920年12月に資生堂ギャラリーで個展を開催。この後、信三は多くの富本作品をコレクションするとともに資生堂の顧客に送る皿や帯留めを依頼するなど富本のパトロンの一人となりました。1955年に第一回重要無形文化財保持者として人間国宝に認定されました。

資生堂美術展覧会

1928年、竹川町11番地に「資生堂化粧品部」が竣工落成し、その2階部分に設けられた資生堂ギャラリー新装記念展の第二弾として始まりました。福原信三と親交のある帝展、二科会、春陽会、国画会などの洋画壇の第一線作家25名に新作を依頼し、一堂に集めた展覧会で、1931年まで計6回開催されました。戦後に始まった「椿会展」や「現代工芸展」母体となる展覧会です。

花椿会と記念品

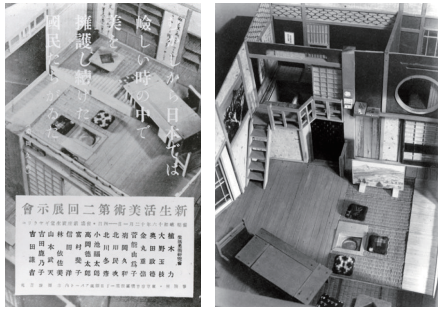
1937年1月に発足した資生堂化粧品の愛用者組織。花椿 CLUB の前身となるものです。花椿会の創設について発表した愛用者向け月刊機関誌『資生堂グラフ』では、「資生堂化粧品御愛用者の御夫人方」を会員とし、「真の女性美を磨く為の『正しい化粧法』と併せて近代女性としての趣味教養を培ふ」ことを目的に掲げました。会員には、月刊機関誌『資生堂グラフ』や美容に関する各種パンフレットを、1937年9月に廃刊した『資生堂グラフ』に代わって11月からは化粧、服飾、流行などを掲載した新しい月刊誌『花椿』を提供するとともに、全国各地で随時開催された美容講習会「花椿会員の集い」に招待しました。また、チェーンストアを通じて、1年間に一定額の資生堂化粧品を購入した顧客には記念品を贈呈。初年度の記念品はアール・デコ風の金属製パニティケース。1938年は椿の図案が入った西陣織ハンドバッグ。その翌年は、富本憲吉が手掛けた陶製帯留でした。いずれも一流のクリエイターによるオリジナルデザインの限定品であり、単なる販売促進用景品の範疇をはるかに超えていました。花椿会の発足により、愛用者とチェーンストア、資生堂の結びつきは一層強化されました。

ブルーノ・タウト(1880-1938)

建築家、都市計画家。ドイツ工作連盟ケルン博覧会でガラス協同組合のために設計したガラス・ドーム「グラス・ハウス」に代表される表現主義の建築家、マグデブルグ市建築監督として色彩計画を中心にした都市を設計した色彩建築家、また、内面的な精神世界の幻視をもとに、古い都市の崩壊と宇宙の光と交信する新しいユートピアの共同体を提唱した「アルプス建築」などに見られる神秘主義者としての建築家など、

多彩な顔を持っています。1933年に来日し、滞日中に各地を歩き、日本の伝統的建築や民俗的美意識を高く評価して「ニッポン」「日本文化私観」「桂離宮」などの著書を著し日本の美を再発見しました。仙台と高崎では工芸デザインの開発と指導を行い、1935年、銀座六丁目に工芸店「ミラテス」を開きました。

9 1941年 新生活美術第二回展覧会



「第二回新生活美術展」案内状 1941年

第二回新生活美術展

資生堂ギャラリーで1941年12月に開催。第一回展は1940年12月に開催。「新生活美術」は舞台美術家の吉田謙吉が中心になって結成されました。メンバーは吉田謙吉、植木力、武田鹿乃子、山本武夫、菊岡久利。案内状には菊岡久利により「むかしから日本では 峻しい時の中で美を 擁護し続けた国民たちがゐた」と書かれ、「蛍光燈の下に空瓶の更生」「抽象画の飾卓」「ポケットの中の雑品入れ」などが出品されました。

山本武夫

資生堂意匠部員、宣伝部美術課長、資生堂顧問(役員待遇)。グラフィックデザイナー。1910年東京生まれ。東京美術学校(現・東京芸術大学)図案科在学中から小村雪岱に師事し、舞台美術を学び、1933年に卒業。同年5月より資生堂意匠部でポスター、商品ラベルや外箱をデザインしました。1937年に結成された資生堂広告美術研究会のメンバーで、「新生活美術」のメンバーでもありました。

吉田謙吉(1897-1982)

日本橋浜町の生まれ。東京府立工芸学校を卒業して、東京美術学校図案科に入学、今和次郎や斎藤佳三に学びました。その後1902年に、飛鳥哲雄、大坪重周らを同人として「尖塔社」を結成して、デザインの研究を続ける一方で、油彩画を二科展に出展したことで、神原泰、中川紀元、矢部友衛らから「アクション」に誘われて参加。バラック装飾社は吉田を仲介に、「尖塔社」と「アクション」の作家たちが集まり始まりました。バラック装飾社の活動と並行して今和次郎と考現学的な「採集」を発表。今和次郎との共著で『モデルノロヂオ 考現学』、『考現学採集(モデルノロヂオ)』を出版。1924年から築地小劇場美術部に属し、舞台美術家として同劇場の第一回公演、ゲーリングの「海戦」に携わりました。資生堂ギャラリーにおいては、1940年とその翌年に吉田謙吉を中心とする生活美術研究会による「新生活美術展」が開かれました。考現学を実践する一方で舞台芸術家としての才能を振るい、1929年の築地小劇場解散後は土方与志を中心とする新築地劇団に参加しました。戦後は日本マイム協会会長や日本舞台テレビ美術家協会など要職を務めました。

* 上記画像の提供元の記載がないものは、資生堂企業資料館提供

中村裕太は、資生堂と赤瀬川原平を調合する



赤瀬川さんのマグカップ 撮影：赤瀬川尚子

「ガラス絵・ハグ」

久しぶりに展覧会への出品作を作った。

テーマは初心。

そういわれなくても久しぶりに作品をとると、昔、作ったものが蘇ってくる。

若い頃は闇雲に作品を作っていた。

自分の立場とか役割というものを考えたりはしなかった。

今でもそれは変わらないにしても、やはり立場というものがある。

自分のなかで過去にたどって来た作品の行列が突然、ガラス絵の裏から見えてくる。

ガラス絵というのは最初の一筆から少しずつ色を積み重ねて仕上げてゆき、それをガラスの反対側から見ものである。

つまり裏返すと最初の一筆がなまなましく見えているのだ。

自分にとっては千円札作品が、その一筆だったのだろう。

もちろん小さい頃から絵が好きで、いろいろなものを描いてはいるが、作家と意識しての最初の一筆は、やはりこれになるのだろう。

もうひとつの「ハグ」は、そんなことを意識した作品ではなかった。

15年前に自分で初めて建てた家が、材木が削りっぱなしの、せいぜいグラインダーを少しかけたぐらいの荒い作りにした。

その方が住んでいて気が楽だし、15年住んでいてもぜんぜん古びない。

それはともかく、前から使っていた家具を持ちこんだが、ぜんぜんそぐわないのだ。

感覚がぜんぜん違う。

ふと、思い立って、自分の愛用の鉋を取り出した。

これで削りなおしたら、どうだろうか。

さすがに躊躇した。

相手はちゃんと完成された家具だ。

それに鉋を振るったりして、自分は正常だろうか。

そう思ったものの、自分が異常ではないことを確かめて、また鉋を振るった。

作業の間中、何度も冷静になってみた。

でも、もともと冷静に考えてのことだった。

家具からは、装飾部分がそぎ落とされて、可能なかぎり白木の部分に立ち返っていく。

細い部分は削りすぎて折れないように気を付けた。

「ハグ」とは装飾を剥いだことの意味だが、最近の流行の言葉としては、力強く抱きしめることをいうらしい。

赤瀬川原平

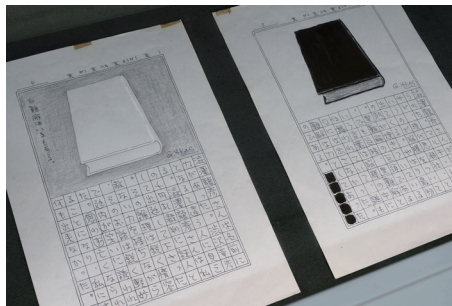
『椿会展 2013－初心－』カタログより

赤瀬川原平（1937－2014）

画家。作家。路上観察学会会員。前衛芸術家。美術史に残る千円札裁判の被告、イラストレーターなどを経て、1981年『父が消えた』（尾辻克彦の筆名）で第84回芥川賞受賞。第七次椿会メンバー。

赤瀬川原平《ハグ2》 1998－2013年

「椿会 2013－初心－」出展作品。1960年代に制作した千円札の印刷作品をもとにして新たに制作した《ハグ1》（2013年）も同展に出品しました。



赤瀬川原平《絵日記》 1987年 「椿会展 2013－初心－」展示風景
撮影：畠山直哉

SHISEIDO GALLERY

会期：2022年2月26日〔土〕 - 5月29日〔日〕

平日 11:00 - 19:00 日・祝 11:00 - 18:00

毎週月曜休（月曜日が祝祭日にあたる場合も休館）

主催：株式会社 資生堂

※新型コロナウイルス感染症の状況により、内容およびスケジュールに変更が生じる場合がございます。